

コミュニケーション能力論とデイヴィドソン哲学

広島大学大学院教育学研究科 柳 瀬 陽 介

コミュニケーション能力に関して、応用言語学においてはウィドウソンの論を例外として、個人内での意味交渉などの動的過程を説明する理論は形成されなかった。本論は哲学者デイヴィドソンの議論が、ウィドウソンの論を拡充し、第二言語教育に貢献するものであることを示す。デイヴィドソンの事前理論・即事理論の論証は、言い誤り・聞き誤りを多く含む第二言語コミュニケーションをうまく説明する。彼の理論は、特定のコミュニケーション成立からコミュニケーション能力を説明し、原則に基づいた認知的な推論の働きがコミュニケーションに大きく関与していることを明らかにしている点で、コミュニケーション能力論に独自の貢献をなしている。彼の議論は、コミュニケーションは、従来考えられていたように事前理論の共有によって成立するものではないこと、およびコミュニケーションを目指す教育は言語学的意味での「言語」を超えた教育となることを明らかにしている。

キーワード：コミュニケーション能力，第二言語教育，第二言語コミュニケーション

1. 応用言語学におけるコミュニケーション能力論

第二言語としての英語教育の目的にコミュニケーション能力の育成を掲げることには異論は少ないだろう。だがその内実である「コミュニケーション能力」¹⁾が何を意味するのかをめぐっては、応用言語学において30年以上の議論が続けられてきたが、未だ決定的な理論は提示されていない。

コミュニケーション能力論は一般に Hymes (1972) に始まったとされている。ハイムズは Chomsky (1965) の competence 規定では、応用言語学の問題を扱えないとして communicative competence という用語を提示し、コミュニケーション能力が、社会言語学的でもありかつ心理言語学的でもあるという基本構想を明らかにした。

Canale & Swain (1980) は、communicative competence を grammatical competence, socio-linguistic competence, strategic competence から構成されるとして、これらの構成要素を knowledge として記述する試みを提示したが肝心の communicative competence に関しては、これら

構成要素の「関係と相互作用」であると述べるにとどまった。その後 Canale (1983) は competence を knowledge and skill として規定することを提案するが、こういった competence 観は、チョムスキーの厳密で一貫した考えを乱用したものとして Taylor (1988) によって手厳しく批判され、communicative competence という用語に事実上の破産宣告がなされた。

しかし第二言語教育の目標としてのコミュニケーション能力の全体像を説明する論の必要性が消えることもなく、Bachman (1990) は communicative language ability という用語で、言語知識と世界知識が strategic competence によって統合される図式を提示した。しかしこの図式においては strategic competence が諸知識を統合するという、従来 communicative competence 全体に託されてきた膨大な役割を担ったままになっており、諸要因の整理という点では一歩進んだとはいえ、コミュニケーション能力の肝心の部分が strategic competence という用語によって詳述されないままに代表されている。その後 Bachman & Palmer (1996) によって strategic competence

は metacognitive strategies として規定され、過大な役割の削減が図られたが、依然として strategic competence は「パンドラの箱」であり続けた (McNamara 1996)。Bachman (2000) は strategic competence の問題を 'test-taking process' という用語で表現し始めた。一方 Celce-Murcia et al. (1995) は strategic competence を具体的な communication strategies を単に総称する用語として使い始め、論文の中心は構成要素の細目表に移ってしまった。コミュニケーション能力論においてコミュニケーション能力の本質ともいえる意味交渉などの動的過程は議論からはずされてしまったといえる²⁾。

だがコミュニケーション能力の本質に関する議論は、かつて Widdowson (1983) によって提示されていた。彼は言語教育の目的を competence と capacity の両方の育成と捉え、コミュニケーションは、前者の知識の習得を基盤としながらも、後者の能力によって言語使用者がその言語使用状況に適応することによって成立すると論じた。

ウイドウソンによるなら、competence とは前もって存在している行動規則への一致 (Widdowson 1983: 8) にすぎない。これは予め知られた問題に対処するには十分な順応であるが、現実世界における言語使用は全て予想されているわけではない以上、言語使用者には問題状況の変化に対応して意味を創り出す能力 (capacity) が必要とされる。Capacity は competence を基準点として前提とするが、両者は基本的に異なるものであり、capacity は教育 (education) が目指すものとして、competence は訓練 (training) が目指すものとして認識されるべきであり、言語教授はこの両方の側面をもつべきだというのがウイドウソンの主張である。

ウイドウソンのこの論は前述のコミュニケーション能力論が構成要素の細目記述に傾斜していったのとは好対照に、コミュニケーションの本質を述べようとした教育学的な一般理論として捉えられるが、その後彼のこの論は彼自身を含めた応用言語学者にはほとんど取り上げられることがなかった。

2. デイヴィドソンのコミュニケーション能力論

筆者は哲学者のデイヴィドソンの論 (Davidson 1973, 1974a, 1974b, 1982, 1986) は、ウイドウソンのコミュニケーション能力論を拡充し、第二言語教育に貢献するものであると考える。英米分析哲学界の重鎮であるデイヴィドソンの哲学は「分析をしつつの総合という本格的なグランド・セオリーの可能性を指し示す全く稀有な存在」(野本 1991: 323) とも評されるが、彼の言語哲学はその哲学体系の中でも中心的役割を果たしている。

デイヴィドソンのコミュニケーション能力論を簡単に要約するなら、それはコミュニケーションの成立を、話者・解釈者それぞれの事前理論 (prior theories) の存在と、話者・解釈者との即事理論 (passing theories) の収束に求めていることとなる。

事前理論とは一言で述べるなら、ある特定のコミュニケーションの成立以前に、話者と解釈者がそれぞれに持っていた知識である。ウイドウソンのコミュニケーション能力論ならば、これは competence に類しており、それは「前もって存在している行動規則への一致」としか説明されていなかったが、デイヴィドソンの場合は、この知識は言語と言語以外に関するもので、再帰的 (recursive) に使われる知識であるとしている (この「再帰的」という意味においてデイヴィドソンは「理論」(theory) という用語を使っている)。言語の知識がその統語的性質に端的に示されているように再帰的であることは周知のことであるが、言語外の知識—いわゆる世界知識—も、非体系的な断片ではなく、基本的に何度も繰り返し適用される知識であるから、ここで、コミュニケーションの成立以前に話者と解釈者がそれぞれにもっていた言語知識および世界知識を「事前理論」と呼ぶことに問題は無いであろう。

コミュニケーション成立以前にもっていた知識を言語知識だけに限るにせよ、世界知識も含めるにせよ、常識的なコミュニケーション観では、その知識を言語共同体のメンバーが共有するものとし、それを言語習得者が共有する限りにおいて言語共同体のメンバーとコミュニケーションが可能

になると想定していた。しかしデイヴィドソンは言い誤り (malapropism) にも関わらずコミュニケーションが成立する例をあげることににより、事前理論の共有だけではコミュニケーションの成立を説明できないことを明らかにした。

言い誤りは、第一言語でのコミュニケーションにおいてもしばしば見られるが(例えば“Lead the way and we'll precede.”といった発話等)、第二言語でのコミュニケーションにおいてはほとんど常に見られるといっても過言でない。第二言語話者はほとんど、定義上、母語話者と言語知識を不完全にしか共有していない存在だからである。それにもかかわらず、第一言語でのコミュニケーションと同様に、第二言語でのコミュニケーションにおいてもコミュニケーションはしばしば成立する。もちろんあまりに重大な言い誤りの場合はコミュニケーションが成立しないが、例えば、冠詞、時制、人称のみならず、時には文構造や内容語の誤用などの言い誤りなどでも、その言い誤りにもかかわらず話者と聴者は相互理解をはたす。この過程を詳細に考察したのがデイヴィドソンである。

例えばある第二言語使用者(A)が“I'll alive at the station at 10.”と聞き取られてしまうように発話し、ある英語母語話者(B)は(A)のその発話の意味は‘I'll be alive at the station at 10.’ではなく‘I'll arrive at the station at 10.’だと「正しく」つまりは話者の意図通りに一理解したとしよう。つまり真理条件的意味論の記述³⁾をするなら“‘I'll alive at the station at 10’ is true if and only if the speaker will arrive at the station at 10.’”ということを(B)が理解したわけである。なぜ(B)が‘I'll be alive at the station at 10.’でなく‘I'll arrive at the station at 10.’の解釈を選んだかに関しては、言語の慣習的な意味だけでは説明できない。「一般に人は駅で生死を分けるような出来事にはめったに会わず、かつ、この(A)もその経験則の例外となるような人間であると考えられる根拠はない。したがって(A)が自らの生死について言及をする特別の理由はなく…」といった世界知識に基づく推論がこの解釈には不可欠である。だからといってこの解釈が、世界知識だけによる当て推量であるわけではない。(B)はあくまでも“I'll

alive at the station at 10.”という実際の発話に基づき、その発話の言語的特性(この場合は特に“alive”と“arrive”がminimal pairとなっていることなど)を最大限に考慮しながら、その発話状況を考え、発話者の「意味が通る」ように解釈したというのが現実の姿であろう。

もう一つ例をあげるなら、(B)の“Why do you study English?”という社交儀礼的な質問に対して、(A)が“Because English use much people.”と発話したと想定しよう。これを慣習の意味で理解するなら(動詞活用形と数量詞の誤りはとりあえず度外視して考えるにせよ)、この発話の解釈者となる(B)は、(A)の発話を「英語が多くの人を(何らかの形で)活用するから」と理解しなければならない。しかし実は発話者(A)が「英語が多くの人に使われているから」を意味することを意図しており、また解釈者(B)もその意図を正しく理解すると仮定してみよう(この仮定は決して非現実的な仮定ではない)。つまり発話者(A)と解釈者(B)は、実際の発話に即しながらも、ある点で実際の発話(の慣習的意味)と、決定的に離れている真理条件である“‘Because English use much people’ is true if and only if the reason for the speaker's studying English is that English is used by many people.’”を理解してもらうことが発話者(A)の意図であるという知識を共有したのである。この言語に即しながらも言語を修正あるいは否定していることこそが言い誤りに満ちた第二言語でのコミュニケーションの現実といえる。

コミュニケーションの現実には、両者が言語共同体の言語慣習へ一致していることだけでは説明できない(そもそも(A)はいわゆる英語の言語慣習を習得しはじめたばかりの存在である)。また両者が初対面してまもないとすれば世界知識(特に「(A)の‘l’と‘r’の発音は時折混用される」「(A)はしばしば受動態を誤用する」といった具体的な知識)を共有しているからとも仮定しにくい⁴⁾。つまりコミュニケーションは事前理論の共有だけでは説明できない。

デイヴィドソンによれば、コミュニケーションの成立において、(近似的に)共有される、すなわち収束(converge)するのは事前理論ではなくむしろ即事理論である。即事理論はある特定の

(成立した) コミュニケーション事例にのみあてはまる—ということは適用範囲が極めて限定された体系的かつ再帰的な知識と説明できる。先ほどの例で説明すれば, “alive”=‘arrive’ というのも, せいぜいそれが(A)の化石化(fossilized)された中間言語なら(A)との会話の時だけに適用されるべき知識であり, そうでなければそれは(A)やその他の第二言語話者が時折不定期に示す—ということは定常的な慣習とは程遠い—過性の知識に過ぎない。二番目の例の「能動態は受動態として理解せよ」というのは, (B)が今後常に適用しなければならない知識とはいえないであろう。しかし, だからといって共有された解釈は, 非体系的で構造を持たない解釈ではない。‘I’ll arrive at the station at 10.’ や ‘English is used by many people.’ といった解釈が, その複雑な内容を持つのは, ここに表現されているような言語に示されている構造を持ちえているからである。Davidson (1975)が言うように, 私たちの思考は, それが私たちの通常使う「思考」という語にふさわしい複雑さと微妙さを獲得するには, 言語表象の力が必要なのである⁵⁾。

即事理論は, デイヴィドソンの用語で解説するならば, 話者の「第一の意図」(the first intention)を特定する解釈の方法である。第一の意図とは, 真理条件的意味論から出てくる概念であり, 発話が, 発話の「文字通りの意味」(後述する「第一の意味」)が成立する場合にのみ真となることを理解してもらおうとする意図のことである⁶⁾。このいわゆる「文字通りの意味」は多くの場合, 慣習の意味であるが, 先ほど確認したように, 言い誤りの場合はその発話の慣習的な意味を取ればコミュニケーションは成立しないので, 私たちは, 慣習の意味とは異なる, 話者が第一にその発話に託したかったはずの意味を想定しなければならない。これがデイヴィドソンのいう第一の意味(the first meaning)である。「文字通りの意味」を慣習の意味とすれば, 言い誤りの場合, 「文字通りの意味」を理解することがコミュニケーションの失敗となってしまう。あくまでも「コミュニケーションから言語を考えようとするデイヴィドソン」(Talmage 1994: 213)はそういった事態を好まず, 慣習的な意味ではなく第一の意味を「文字通りの

意味」であると規定した。第一の意味を, 慣習的な意味とは原理的には独立させることによって, デイヴィドソンは事前理論と異なる即事理論を想定することができ, それにより言語使用者が数々の言い誤りなどにもかかわらずコミュニケーションを成立させることをうまく説明したといえる。この即事理論はコミュニケーションの意味交渉, いわゆる動的過程の表象をうまく記述・説明する概念であり, これ抜きのコミュニケーション能力論は, 「コミュニケーションが慣習への従属にのみによって常に成立するという誤謬」(Davidson 1982)を含んだ論といえる。

このように事前理論の共有がコミュニケーション成立の必要十分条件でも十分条件でもないことを明らかにした点で, デイヴィドソンは, コミュニケーションには「問題状況の変化に対応して意味を創り出す能力」すなわち capacity が必要であるとしか述べていなかったウィドウソンの主張を具体例による論証の形で拡充したといえる。デイヴィドソンのコミュニケーション能力論はウィドウソンの論と基本的発想を同じにしながらも, より精緻かつ広範囲に論証を進めている論である。

3. デイヴィドソンの根本的発想

こういったデイヴィドソンのコミュニケーション能力論は, その根本的発想が従来の応用言語学的発想と異なることにより, コミュニケーション能力論考察に新しい光をあてている。

第一の根本的発想は, 論の前提を, 従来の発想とは逆に特定のコミュニケーションの成立に求めたことである。ハイムズ以来の従来の論は, たとえチョムスキーを批判するにせよ, 基本的にはチョムスキーの発想を継承するものであった。その発想は, それが何を意味するものであれ, まず「言語」を存在するものとして想定し, それを獲得し, 使用すると考えを進めてゆく(Chomsky 1965, 1986)。使用の場合, チョムスキーと違って, 応用言語学者はその使用が共同体の慣習に合致して「正しく」使用することを想定しているが⁷⁾, いずれにせよコミュニケーションは言語の獲得・使用の先に想定されるものであり, 議論の根幹を構成はしていない。

これに対してデイヴィドソンは、ある特定の話者がある特定の状況においてある特定の解釈者に向けて発話し、そのコミュニケーションが成立することを議論の前提とし、かつそのコミュニケーションの成立のためには何が必要とされているかということを中心とした。これは「言語」ではなく「特定のコミュニケーションの成立」を出発点にして議論を始めている点で、ラディカルなほどに言語使用の現実に即した論証のスタイルである。このアプローチは応用言語学者のみならず、チョムスキーやソシュール以来の言語学にはみられない。ソシュール以来の理論言語学は、「言語」(langue, competence, I-language etc.)を考察の対象とし、言語使用(parole, performance, E-language etc.)は「言語」研究の後に考察される問題であり、コミュニケーションも言語使用の類義語あるいは派生概念程度にしか認識されていなかった。Chomsky(2000: 29)にいたっては、コミュニケーションの全体像を考察することを'a study of everything'と評し、自らの言語研究のアプローチからは排除している。すなわち従来の言語学的・応用言語学的発想からは、コミュニケーションの成立は最終的には説明されがたい概念であるとされているといえる。このアプローチを取る限り、コミュニケーション能力の全体像はあやふやにならざるを得ない。デイヴィドソンはこのアプローチを逆転させた。

デイヴィドソンの論証は「言語」の確たる存在および共有を前提とする言語学的発想からすれば、いかにも周辺事例を扱っているようにしか思えないかもしれない。だが、第二言語コミュニケーション(話者・解釈者の片方もしくは両方が第二言語として当該言語を話しているコミュニケーション)においてはデイヴィドソンの事例はむしろ中心事例であるといえよう。第二言語コミュニケーションにおいては言語使用者が不完全にしか当該言語共同体の慣習を習得していないことが常態だからである。こういった状態においては、当該言語共同体の慣習からすると、言い誤り・聞き誤りが絶え間なく生じる。それにもかかわらず第二言語コミュニケーションは成立するのであるから、第二言語を対象としたコミュニケーション能力論は、このように言語慣習が必ずしも共有されていない

状況における理解を説明できる論でなくてはならない。この点においてデイヴィドソンのコミュニケーション能力論は従来の言語学的・応用言語学的コミュニケーション能力論とは全く異なる貢献を第二言語コミュニケーションの説明に対して行っているといえる。

デイヴィドソンにおいて注目すべき第二の根本的発想は、コミュニケーションが原則に基づいた認知的な推論の働きにより成立していることを明らかにしたことである⁸⁾。彼の事前理論・即事理論の根底には根元的解釈(radical interpretation)の考えがある。「必ずしも言語を共有しない二者が相互理解をする」という、デイヴィドソンの師クワインから引き継がれた問題(Quine 1960)をデイヴィドソンは基本的出発点とした。ここにおいて言語の共有は必ずしも要請されてはいない。言語以外の助けによりコミュニケーションが成立する姿を描き出すことがデイヴィドソンの問題意識なのである。

例えば英語母語話者と話をする第二言語話者であるが、前者が後者に対して特別の配慮をしないかぎり、前者は後者が少なくとも表面上は理解できない発話をすることは多々ある。速すぎて語認知ができない発話や第二言語話者が予期していなかった発音による発話もその例であろうし、第二言語話者が知りえていない言語慣習に基づいた語彙(平たくいうなら、第二言語話者がまだ知らない語彙)を使うこともその例であろう。無論その場合、第二言語話者がしばしば行うことは解釈をせずに、“I beg your pardon?”と単に聞き返すことであろうが、その聞き返しとて何度も繰り返すならばコミュニケーションの中止に追い込まれるだろう。現実的には、第二言語話者は“Do you mean ...?”や“So you're suggesting ...”などで自らの解釈を明らかに示さなければならない。そもそも英語母語話者が例えば30秒間でも話し続けるとしたら、第二言語話者はその間、解釈を続けなければならない。つまり第二言語コミュニケーションの現実には、しばしば発話をそのままに理解⁹⁾できないままに、解釈を余儀なくされるものである。

第二言語話者は“I wonder if he's not too ***.”といった発話(“***”は第二言語話者がそのままに理解できない部分を表す)を、その直接的な理

解の欠如にもかかわらず、真理条件的意味論の記述にしたがうならば、“I wonder if he's not too ***.” is true if and only if the speaker is suggesting that the person he's been talking about is XYZ.’ (XYZは第二言語話者が把握している言語的表象)といった解釈を行わなければならない。だがこの理解不成立から(それなりの)解釈成立までは、“***”を聞き取れなかったと仮定した以上、言語外の要因によって説明されなければならない。

その場合、「当て推量によって解釈はなされる」というのは誤解を招きやすい表現である。何らかの推論が行われるという点ではもちろんこの表現は正しいが、もし「当て推量」という表現がランダムな選択を含意するのならそれは理解の現実を歪めて捉えているといえよう。「当て推量」は、何らかの原則に基づいて行われている。私たちは表面上理解できない発話を解釈する場合に、ハンプティーダンプティの恣意に混乱させられたアリスのような絶望を経験しているのではない。しかし、それではその解釈の原則とはなんであろうか。それを徐々に明らかにするのが根元的解釈の議論(Davidson 1973, 1974a)である。

根元的解釈においては、解釈者は、公然と明らかになっている証拠(evidence)から、発話の意味と発話者の信念(belief)という明らかになっていないものにたどり着かなければならないとする。このアプローチは常識的な意味での経験主義の立場(外的な証拠からの出発)と、言語発話の全体論(holism)的立場(発話の意味と発話者の信念は相互依存していることの認証)の統合を基にした議論である(Knight 1992)。

私たちの例において、解釈されるべき発話は、完全には認識されないものであり、解釈の証拠としては不十分であった。証拠として他に考えられるのは発話時の世界のありよう(how the world is arranged in the speaker's vicinity at the time of the utterance, *ibid.* 22)である。だがこの世界のありようは、解釈を決定する証拠ではない。世界のありようによって意味が決定されるとするならば、それは極端な行動主義の誤謬を犯すこととなる(Chomsky 1959)。世界のありようはせいぜい解釈の制約として働く証拠にすぎない。

それでは部分的に認識された発話と、制約として働く世界のありようから、解釈者はたとえ仮説的とはいえどうやって解釈に到達するのだろうか。実は解釈者にとってはさらに問題がある。それは発話の意味と発話者の信念が相互依存していることである。解釈者は‘The person he's been talking about is XYZ.’という解釈のXYZを確定する際に、発話者がその言及されている人物に対してどんな信念を持っているかを参考にしなければならない。しかし発話者の信念というのはまさにその発話の意味によって明らかになるものであるから、発話の意味を知りえていない解釈者は発話者の信念を確実に知っているとはいえない¹⁰⁾。したがって発話者の信念に関する解釈者の知識は解釈にとっての確たる証拠にはならない。発話の意味は一部において決定的にわからない。世界のありようという外的なデータも制約としてしか働かない。発話者の信念もわかりえない。解釈者はこういった状況でどう解釈を確定するかというのがここでの問題である。解釈を確定するための、発話の意味とも発話者の信念とも独立した証拠とは何であろうか。

問題の解決は、異なった種類の証拠を求めることである。外的に明らかにされている発話や世界のありようでもなく、発話の意味によってはじめて確定される信念でもなく、発話者がその発話に対して抱いている態度(attitude)である。端的に言うなら、発話者は発話を真理だとみなして発話をしているという態度を解釈のための証拠とすることである。

これに対しては直ちに次のような反論が来るだろう。第一の反論は、嘘や命令やフィクションや皮肉などの発話に関する発話者の態度が、発話を真理だとしているものだと想定してよいのかというものである。第二の反論はこの場合の真理とは誰にとっての真理なのかという問いである。「何が発話者にとっての真なのか」と問うならば、それは発話者の信念の問題となり、今までの困難に逆戻りしてしまい、「真理」は確定されず、発話者の態度は何の証拠にもならないのではないか、というものである。第三の反論は、そのような証拠では解釈が十分に確定されないのではないかというものである。それぞれの反論に答えてみたい。

第一の反論は、発話にはその種類にとって固有の解釈があるという指摘においては確かに正しい。しかし真理はどの種類の発話に対してもあてはまる唯一の性質である。嘘は発話者が、解釈者に発話者が発話を真理であると信じていると解釈させることによりはじめて成立する。命令も解釈者が、発話の文字通りの意味が真理でありうると解釈することにより、はじめて従うことが可能になる。フィクションも解釈者が発話を真理だと仮定することによりはじめて成立する。皮肉も解釈者が発話の文字通りの意味を真理だと仮に想定した上でないと、それが現実とは全く逆（すなわち皮肉）であることが成立しない。一般的に言えば、真理は、グライス流の会話の公理(Grice 1975)や関連性理論(Sperber & Wilson 1995)などの話者の意味を確定させるための推論を適用するためには最初に想定しなければならない概念であるといえる。このようにどのような発話に対しても真理は最初に想定しなければならない性質であるがゆえ、第一の反論は退けられる。

第二の反論はクーン(Kuhn 1962)流の相対主義的反論といえる。真理が「発話者にとってのものにすぎない」なら、それは解釈者には不可知となるのではないかと議論するからである。この問題に関してデイヴィドソンは詳細に反論しているのであるが(Davidson 1974b)、紙幅の関係で、ここでは簡単に反駁すると、私たちは何が真理であるかに関しての大きな概念枠を共有しない限り、一致どころか不一致についても語り得ない、ということになる。一致や不一致はその他多くの背景が共有されてこそ成立する。したがって、私たちの真理概念は、部分的な不一致や時折の錯誤や後々の修正の可能性を許した上での確固たる概念（つまりは、それなりの証拠）として成立していることになる。真理概念が共有されているのだとすれば、解釈者は発話を真理として成立させるのに、できるだけうまくゆく真理条件を選ぶべしという解釈の原則が成立する。これが寛大の原則(the principle of charity)である。これは「寛大」という言葉が示唆しかねないような「お人好し」の態度ではない。もし発話者が、私たちの真理概念と根本的に異なるとすれば、私たちはその発話者が何か意味あることを言っているとは想定できな

いからである(Davidson 1975)。真理概念の大筋での共有および寛大の原則はコミュニケーション成立の必要条件であり、その点で第二の反論は実は成り立つことの不可能な反論なのである。

第三の反論は、寛大の原則に基づいても、唯一無二の解釈には到達できないという点では正しい。しかしこれはクワインがいった翻訳の不確定性(the indeterminacy of translation)よりはるかに低い程度の不確定性であり、これは当座の解釈に十分であり、今後のコミュニケーションの進行に伴って漸次限りなくゼロに近づいてゆく類のものである。したがって第三の反論は本質的な反論ではありえない。

このように言語に基づきながらも言語にとどまらない認知的な働きを明らかにしたところが、デイヴィドソンを言語学者・応用言語学者とわけへだてる第二の根本的発想なのである。

4. デイヴィドソンのコミュニケーション能力論からの示唆

以上の二つの根本的発想から、以下の二つの示唆が、第二言語教育に対して導かれる。第一の示唆は事前学習の限界の指摘である。デイヴィドソンは事前理論と異なる即事理論がコミュニケーション成立のための鍵であることを示して、「明確に定義された構造を言語話者が共有しており、それを言語使用者が習得し適用するという図式を捨てなければならない」(Davidson 1986: 446)ことを明らかにした。このことは言語共同体慣習への完全な一致が期待できない第二言語教育においては、コミュニケーションをその目的とするならば、事前理論のための(伝統的な意味での)言語学習と、即事理論のための言語経験¹¹⁾の二つが柱とならなければいけないことを明らかにしている。言語学習者が、予めどのようなようになるかは定められていない言語使用を行う言語経験は、第二言語教育にとっての余録ではなく、コミュニケーションのための第二言語教育を成立させる二本の柱の一本なのである。

第二の示唆は言語教育が、コミュニケーション能力発達を目的とせよとならば、それは「言語の教育」あるいは「言語についての教育」を必然的に

超えてしまうことである。デイヴィドソンによる、特定のコミュニケーション事例のための即事理論の設定において、言語使用者が身につけておかなければならないのは言語に関する知識だけではないことが決定的に明らかになった。デイヴィドソンは「言語を知ることと、この世界での身の処し方を知ることの間の境界を消し去った」(Davidson 1986: 445-6)わけである。

5. 結論

特定のコミュニケーション成立を出発点とし、狭い意味での言語を超えて論証をするデイヴィドソンはコミュニケーション能力論に対して独自の重要な貢献をはたしており、第二言語教育に対しても言語経験、および世界との関わりへの重視といった重要な示唆を与えている。

註

- 1) いわゆる日本語でいうところの「コミュニケーション能力」は、英語文献においては 'communicative competence,' '(communicative) capacity,' '(communicative) language ability,' 'linguistic ability,' 時には 'linguistic competence' といった用語で表現されている。この論文ではこれらが意味する能力を一括して表現する場合は「コミュニケーション能力」という用語を用い、英語文献の議論のニュアンスを出すべき時には、それぞれの英語での用語を用いることとする。なおこの論文ではコミュニケーション過程に関する議論も一括してコミュニケーション能力論として扱う（この区別に関しては査読者に深く感謝する）。
- 2) 一方 classroom interaction などの研究では「意味交渉」がトピックとしてあげられているが、この「意味交渉」は話者と聴者がお互いに対話を重ねて意味を明らかにする過程であり、本論文が考察している個人内での「意味交渉」はほとんど扱われていない(Tsui 2001: 121)。
- 3) ここに示されている真理条件的意味論はデイヴィドソンらが発展させた意味論であり、意味という不明確な対象を、真理条件 (p is true if

and only if s) という意味よりも明確な形で示す方法を特徴としている。ただここで誤解をしてはならないのは、意味と真理条件が等価とされているのではなからぬことである。真理条件は「文字通りの意味」(literal meaning)が充足しなければならない条件であり、「話者の意味」(speaker's meaning)を説明する概念ではない。私たちが日常言うところの「意味」とは「文字通りの意味」と「話者の意味」を合わせた総称であり、それと真理条件を同じものだとするのは誤解である。なお真理条件を表現する言語（メタ言語）は解釈される発話の言語（対象言語）と同じである必要はない。

- 4) 「第二言語話者はしばしば言い誤りをする」といった世界知識を(B)が持っているとはいえるだろうが、そういった知識は一般的すぎて具体的な発話の解釈には役立たない。
- 5) もし思考に言語が必要ではないと考えるのなら、'English is used by many people.' などの解釈を、言語を使わずに他人に対して表象することを試みたい。仮に例えばジェスチャー・ゲームでその表象に成功したとしても、その一連のジェスチャーがどれだけ言語の統語的特徴、意味論的特徴などに依存しているかを考えたい。
- 6) 誤解のないように補足しておかなければならないが、いわゆる発話の意図はこの第一の意図に限られるわけではない。人はある発話に対して様々な意図をこめることができるし、またそのように解釈もされる。この様々な意図の総称が「話者の意味」である。ただしそれらの様々な意図も、すべて第一の意図に端を発していることは明記されなければならない。
- 7) チョムスキーが、いわゆる言語慣習における誤りを本質的問題と考えていないことに関しては Chomsky (2000) を参照されたい。
- 8) コミュニケーションにおける推論の働きは Grice (1975) や Sperber & Wilson (1995) も強調しているが、デイヴィドソンは本文で後述するように、彼らの議論が前提としている段階においても推論の働きがあることを主張している点で彼らの論とは異なる。
- 9) Burge (1999) は直接的な理解を「把握」(comprehension)、推論による正当化の必要な

- 理解を「解釈」(interpretation)と区別した。その区別にしたがうならここでの「そのままに理解」というのは把握ということになる。重ねて確認するまでもないがここでは「理解」(understanding)という言葉が、「把握」と「解釈」を合わせた総称として使われている。
- 10) たとえ解釈者が「話者は今まで言及されている人物に好意を持っていた」という話者の過去の信念を知っていても、それだからこそ今回も好意的な発言をするのか、あるいは、それだからこそ今回は敢えて批判的な発言をするのかは特定できない。
- 11) 「言語活動」という用語は、しばしば言語規則の適用に過ぎない意味での言語使用を指す現状に鑑み、ここでは「言語経験」という用語を用いた。

参考文献

- Bachman, L. F. 1990. *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Bachman, L. F. 2000. "Modern language testing at the turn of the century: Assuring that what we count counts." *Language Testing*, 17(1): 1-42.
- Bachman, L. F. and Palmer, A. S. 1996. *Language testing in practice*. Oxford: Oxford University Press.
- Burge, T. 1999. Comprehension and interpretation. In Hahn, L. E. *The philosophy of Donald Davidson*. Illinois: Open Court.
- Canale, M. 1983. From communicative competence to communicative language pedagogy. In J. C. Richards and R. W. Schmidt (eds.), *Language and communication*. (pp.2-27). London: Longman.
- Canale, M. and Swain, M. 1980. "Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing." *Applied Linguistics*, 1 (1): 1-47.
- Celce-Murcia, M., Dörnyei, Z. and Thurrell, S. 1995. "Communicative competence: A pedagogically motivated model with content specifications." *Issues in Applied Linguistics*, 6 (2): 5-35.
- Chomsky, N. 1959. "Review of Skinner (1957)." *Language*, 35: 26-58.
- Chomsky, N. 1965. *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. 1986. *Knowledge of language*. New York: Praeger.
- Chomsky, N. 2000. *New horizons in the study of language and mind*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Davidson, D. 1973. Radical interpretation. In Davidson 1984.
- Davidson, D. 1974a. Belief and the basis of meaning. In Davidson 1984.
- Davidson, D. 1974b. On the very idea of a conceptual scheme. In Davidson 1984.
- Davidson, D. 1975. Thought and talk. In Davidson 1984.
- Davidson, D. 1982. Communication and convention. In Davidson 1984.
- Davidson, D. 1984. *Inquiries into truth and interpretation*. Oxford: Oxford University Press.
- Davidson, D. 1986. A nice derangement of epithets. In E. LePore (ed.) *Truth and interpretation*. (pp.433-446). Oxford: Blackwell.
- Grice, P. 1975. Logic and conversation. Reprinted in A. P. Martinich (ed.) *The philosophy of language*. Fourth edition. (pp. 165-175). Oxford: Oxford University Press.
- Hymes, D. 1972. On communicative competence. In J. Pride and J. Holmes (eds.), *Sociolinguistics: Selected readings*. (pp. 269-93). Harmondsworth: Penguin.
- Knight, D. 1992. "The anomaly of literal meaning in Davidson's philosophy of language." *Philosophy Today*, Spring: 20-38.
- Kuhn, T. S. 1962. *The structure of scientific revolutions*. Chicago: University of Chicago Press.
- McNamara, T. F. 1996. *Measuring second language performance*. London: Longman.

- Quine, W. V. 1960. *Word and Object*. Cambridge, Mass.: M. I. T. Press.
- Sperber, D. and Wilson, D. 1995. *Relevance: Communication and cognition*. Second Edition. Oxford: Basil Blackwell.
- Taylor, D. S. 1988. "The meaning and use of the term 'competence' in linguistics and applied linguistics." *Applied Linguistics*, 9 (2): 148-68.
- Tsui, A. B. M. 2001. Classroom interaction. In Carter, R. and Nunan, D. (eds.), *The Cambridge guide to teaching English to speakers of other languages*. (pp.120-125). Cambridge: Cambridge University Press.
- Widdowson, H. G. 1983. *Learning purpose and language use*. Oxford: Oxford University Press.
- 野本和幸, 植木哲也, 金子洋之, 高橋要訳. 1991. 『真理と解釈』東京: 勁草書房

Davidson's contribution to theories of communicative competence

by

Yosuke YANASE

Graduate School of Education, Hiroshima University

Although various theories of communicative competence have been put forward in applied linguistics, the dynamic process of negotiation of meaning in the individual has mostly been left unexplained, other than by Widdowson. This paper argues that Donald Davidson's philosophical analysis extends and elaborates Widdowson's argument and thus contributes to theories of communicative competence and second language education. Davidson's concepts of *prior theories* and *passing theories* are particularly suited to accounting for communication in a second language which is successful despite many mistakes and errors. Davidson starts his argument from the assumption of such successful communication, and not from the Chomskian ideal assumption of the knowledge of language. He then makes it clear that communication is a cognitive as well as a linguistic process. From his argument we learn that passing theories are one of the two major targets of second language education along with prior theories, and that teaching language for communication necessarily goes beyond the strict boundary of 'language' as is assumed in theoretical linguistics.